

博士學位論文要約

論文題目：ローマ帝国支配期カルタゴ周辺地域における文化と記憶
氏名：井福 剛

要約：

本論文は「ローマ帝国支配期カルタゴ周辺地域における文化と記憶」という題目のもとで、カルタゴ周辺地域における都市文化の形成とそれに関連する記憶について考察したものである。

ローマ支配期北アフリカの文化に関する研究は、20世紀初頭のアヴァフィールドの研究以降、ローマ化概念を軸に解釈されてきた。このローマ化を中心にした研究は、その言葉が示す通り、ローマ文化がいかに浸透したかに関心が寄せられたため、ローマの支配を受ける前から存在する文化については「消え去りいく文化」として触れられる程度である。

こうしたローマ化を中心とした解釈に対して1960年代頃から批判が行われるようになり、近年ではポストコロニアル理論の影響を受けた属州研究者がそうした批判の中心を担っている。ポストコロニアル理論の影響を受けた研究者たちは、異種混濁化、クレオール化という概念を用いた属州研究を提唱し、従来のローマ化を中心とした属州研究を帝国主義的言説として退けた。

本稿では、以上の研究動向を踏まえた上で、どのような状況で異種混濁的文化が生じたのかという問いを出発点とする。異種混濁的文化が生じる過程を具体的なコンテキストに置くことで、単に文化が混じり合ったというだけではなく、その文化が現地の人々にとってどのような意味をもっていたのかを明らかにすることが可能となる。

以上の問題に答えるために、第1章から第3章では都市エリートによる神殿建設という宗教的実践を考察する。次に第4章では、かつて北アフリカに存在していたカルタゴが古代ローマにおいていかに記憶されていたのかを分析する。第5章では、第4章で論じたカルタゴの記憶が北アフリカの文化といかに関連するのかを考察する。

第1章では、宗教的実践を具体的に見ていくために、北アフリカの都市トゥッガにおけるマルキウス氏族に焦点を絞り考察する。ローマの支配に入ってから以降、トゥッガには現地の人々のコミュニティであるキウィタス (*civitas*) と、ローマ市民権保持者のコミュニティであるパグス (*pagus*) の二つのコミュニティが存在していた。マルキウス氏族は、現地の人々のコミュニティであるキウィタスから台頭し、ローマ市民権を獲得してパグスのメンバーとなったエリートである。また、マルキウス氏族のうち複数のメンバーが両コミュニティの保護者を担ったことから、この氏族が二つのコミュニティを

つなぐ役割を果たしたと考えられる。そのようなマルキウス氏族のメンバーが建設したのが、166-8年頃に建設されたカピトリウム神殿である。

カピトリウム神殿は両コミュニティが行政区分上、一つの都市となっていく変化の過程の中で建設された。この神殿は二つのコミュニティが一つのまとまりとなって形成される新たな「トゥッガ」を意識して建設され、新たなコミュニティにふさわしい宗教のあり方、都市の景観のあり方をエリート層が選び取った結果として捉えることができる。このカピトリウム神殿は新たな段階にいたりつつあったトゥッガの宗教的アイデンティティの象徴として機能したのである。

第2章では、マルキウス氏族同様、キウィタスから台頭し、ローマ市民権を得たエリート層であるガビニウス氏族に焦点を当て考察する。この氏族もマルキウス氏族とほぼ同時期に多くの公共建築物を建設し、両コミュニティをつなぐ役割を果たしたと考えられる。

このガビニウス氏族のメンバーが建設したのが117年-138年頃に年代づけられるコンコルディア、フルギフェル、リベル・パテル、ネプトゥヌス神殿である。この神殿には昔から現地で信仰されていたと考えられる神々と同時に、ローマの神も祀られていた。つまり、この神殿はそれぞれのコミュニティにとって重要な神々が祀られていたことになる。ガビニウス氏族のような両コミュニティと関係をもつエリートが、それぞれのコミュニティに目配せの効いた神殿を建設したのである。この神殿はムニキピウム（自治市）になる以前の二重のコミュニティであった時期に、両者をつなぐシンボルとして創り上げられた信仰の一事例であったといえるだろう。

第3章では、194/5年頃というトゥッガがムニキピウムになる205年のまさに直前の時期に建設されたサトゥルヌス神殿について考察する。この神殿に祀られたサトゥルヌスは、北アフリカで信仰されていたバアル神がローマ時代に名を変えたものと考えられている。このサトゥルヌス神殿はもともとバアルの聖域であった場所に建設された。サトゥルヌスというキウィタスにおいて重要な神を祀ると同時に、パグスのローマ市民権保持者にとって、自身の属する「ローマ世界」において支配的であるローマ文化の神殿形式を流用した結果、創造されたのがこのサトゥルヌス神殿であったといえる。

当時のトゥッガの政治状況がトゥッガの人々に両コミュニティをつなぐ信仰のあり方の選択を促し、そうして創り上げられた神殿が新たな段階にいたりつつあるトゥッガのシンボルとして機能したのである。そのような文化的実践の積み重ねの結果、205年に行政区分上は両者の境界は解消され、二重性を内包しながら一括りの都市へといたることになったと考えられる。サトゥルヌス神殿はそのような両コミュニティをつなぐ実践の一事例とみなすことができるのである。

第4章では、ポエニ戦争後から帝政初期にかけて、ローマの著作に表れてくるカルタゴ・イメージについて分析する。共和政末期から帝政初期にかけての時代には、ギリシア人以来の使い古された狡猾で、残酷で、不誠実なカルタゴ人像だけではなく、その延

長線上にありながらも、ネガティブなイメージが強調され、残虐性の際立った形のカルタゴ・イメージが現れてくる。「内乱の一世紀」において、こうしたネガティブなカルタゴ・イメージは、ローマ人内部の敵に対して用いられた。カルタゴ・イメージは、国家が転覆しかねない状況において、国家を脅かすローマ人に対して敵のイメージを付与するために利用されたのである。つまり、カルタゴ・イメージはローマ市民の中に「味方」と「敵」という境界を作り上げるための便利な道具として用いられたと考えられるのである。

第 5 章では、カルタゴの記憶と再建後のローマ都市カルタゴの関係について考察する。カルタゴ植民市はローマ帝国の *Concordia*（調和）を体現するかのよう都市として再建されたにもかかわらず、そこには第 4 章で論じた敵対者であるポエニ期カルタゴにまつわる記憶として *Discordia*（不調和）がつきまとっていた。

さらに、こうしたカルタゴの記憶を想起させたのは再建された都市カルタゴだけではない。ポエニ期カルタゴ由来とされる文化に関しても、かつてのカルタゴの記憶がつきまとっていたのである。ポエニ期カルタゴ由来とされる女神カエレスティスは、カルタゴにおいてはかつてのカルタゴの偉大さを想起させ、都市アイデンティティを強化するものとして、トゥッガにおいてはローマ都市の代表であるカルタゴの「ローマ的」文化として、何の齟齬もなく受け入れられていたと考えられる。しかしながら、同時にカエレスティスは、かつてのカルタゴとつながりをもつものと意識されていた。つまり、「ローマ的」文化の一部となりながらも、つねにかつての敵であったポエニ期カルタゴの記憶を想起させる可能性があったといえるだろう。

ここまでの本論の考察から結論として以下のことが指摘できる。第 1 章から第 3 章まで見てきたように、2 世紀において二つのコミュニティと関係を持つエリート層が、さまざまな公共建築物を建設する中で、新たなコミュニティとしてふさわしい宗教的アイデンティティを創り上げていったことを示した。エリートたちは、ローマの神であれ、現地の神であれ、新たな段階へいたる都市としてふさわしい信仰を選び取っていった。そうした宗教の中には都市ローマを象徴するようなカピトリウム神殿もあり、同じように現地で古くから信仰されていたサトゥルヌス神殿、あるいはローマの神と古くからの神を組み合わせた神殿が含まれていたのである。同じように新たな宗教的アイデンティティを模索しながらも、そこには「ローマ文化」や「現地文化」というカテゴリだけでは捉えきれない多様な要素が詰め込まれていたのである。

では、こうした宗教的实践によって創り上げられた文化をトゥッガの人々はどのように受容していたのだろうか。まず、そこには新たな段階にいたりつつある都市にふさわしいものとして創り上げられた景観が関係してくる。2 世紀において次々となされた「ローマ風」の公共建築物の建設によって都市の景観は一変したことだろう。特に、都市の中心のフォルムの整備と、それと連続して建設されたカピトリウム神殿は、都市の景観を明確に変えるものだった。こうした景観の変化はそれを見るトゥッガの人々に、

新たなコミュニティへと自らの都市が変化していることを、視覚的に認識させたと考えられる。

さらに記憶の問題も受容と関わってくる。第4章で提示した敵としてのネガティブなカルタゴの記憶が、第5章で分析したカルタゴ植民市やカエレスティス神殿に、エンコード側の意図を越えて、Discordiaのイメージを付与していたことを指摘した。ローマ都市としてのカルタゴや「ローマ風」のカエレスティス神殿を見る際に、受容者はそこに「ローマ文化」を見ると同時に、かつてのポエニ期カルタゴの記憶を想起する可能性も存在していたのである。

最後に、ローマ帝国支配期北アフリカにおいて、特にトゥッガを含めたカルタゴ周辺地域において、「ローマ」とは何であったのか。植民市カルタゴと深い関係があるトゥッガの人々にとって、海の向こう側の都市ローマよりも、身近にあるローマ都市カルタゴの方が、ローマを体現するものとして機能した可能性が指摘できるだろう。この主張が正しいのであれば、カルタゴ周辺地域の「ローマ」のイメージは全てが直接都市ローマに由来するわけではなく、ローマ都市カルタゴを通して形作られたと考えられる。

そのような、部分的であったとしてもカルタゴを通して形成された「ローマ的なるもの」は当然、正確に「ローマ」を表象していたわけではない。そこには北アフリカで古くから信仰されていた神々やカルタゴの記憶を帯びた神々も含まれてくるのである。

しかし、これだけでは他属州においても類似した事例は多数存在し、北アフリカの特異性とみなすことはできないだろう。ローマ以前の文化とローマ文化が混淆した結果、「ローマ的なるもの」にも地域的差異が生じているという、ローマ帝国内ではどこでも起こりうる現象である。これだけでも、ローマ帝国内の属州文化の一事例として意味のある結論ではあるが、ここでは北アフリカ、特にカルタゴ周辺地域の特異性についても指摘しておきたい。

その特異性とは、カルタゴに由来するものである。ポエニ期カルタゴがもっていた敵としてのネガティブな記憶は、カルタゴが滅亡し、実体としてのカルタゴが存在しなくなったことで、それを直接引き継ぐものは存在しないはずであった。しかし、本来、関係のないはずのローマ植民市カルタゴが「カルタゴ」という名を帯びて再建されたことで、その都市の名にかつてのカルタゴの記憶が付随してしまうことになったのではないだろうか。さらにカエレスティスのようなカルタゴ由来の文化は、少なくとも言説において、ポエニ期カルタゴからその信仰が継続してきたと記憶されていた。

こうしたことから、少なくともカルタゴ周辺地域において、単に地域的差異だけでは済まされない特異性が生じたといえるだろう。カルタゴ周辺地域においては「ローマ的なるもの」の中に、かつての敵であったカルタゴを想起させる可能性のある文化が含まれていたのである。このことは他属州においては見られない、この地域の特徴としてあげることができるだろう。

しかし、この「ローマ的なるもの」は以上のような差異をはらみながらも、ローマ帝

国内を結びつける共通性であったことも指摘しておかねばならない。それぞれの地域で差異がありながらも、「ローマ的なるもの」という共通項がローマ帝国を束ねていたものであったと考えられるのである。

先述したように、カルタゴ周辺地域においてはこの「ローマ的なるもの」は、カルタゴの記憶を帯びた文化を含み、都市ローマそのものではなく、部分的には植民市カルタゴを通して形成されていたと考えられる。すなわち、ローマという中心が複数化していると言いかえることができる。

サバルタン研究で有名なディペシュ・チャクラバルティはその著書『ヨーロッパを地方化する (*Provincializing Europe*)』において、ヨーロッパの歴史や思想を普遍的で中心的なものとするのではなく、個別の歴史をもつ一地域としてヨーロッパ自体を地方化することを提唱している。

都市ローマの政治的、象徴的な中心性は否定できないが、文化面においては「ローマ文化」を代理=表象するカルタゴのような地方都市が存在し、それが地方において「ローマ的なるもの」を形成する要因となっていたと想定するならば、「ローマ文化」、「ローマ的なるもの」の属州化ともいえる現象が起きていたといえるだろう。このことは決してベナブが述べる「アフリカ化」のようなローマ/現地という二項対立を想定したものではない。属州化は「ローマ的なるもの」が属州ごと、地方ごとに複数化していくことを意味しているのである。

このような属州化した「ローマ的なるもの」を見ていくことで、ローマ帝国全体を結びつけていたものが何であるのか見えてくると同時に、それぞれの地域ごとの「ローマ的なるもの」の差異から、その地域のもつ特殊性も明らかにすることができるのではないだろうか。本論文での主張はそのような属州の文化研究へとつながっていくものと考えている。